

平成 28 年度卒業式 学長式辞

柔らかな春の日差しが平和都市、広島を包み込む季節となりました。そして今日の良き日、238名の皆さんの旅立ちを、広島県知事ご代理 県民生活部長小寺洋様、同窓会会長 齋藤譲子様を始め、多くのご来賓の方々のご臨席のもとにお祝いできますことは、私達教職員一同の最も喜びとするところであります。ご卒業・ご修了おめでとうございます。併せてこうして旅立つ皆さんをこれまで支え、励まし、ともに卒業式に参列されている保護者の皆様に対しまして、あらためて心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

卒業生・修了生である皆さん、今まさにこの広島キャンパスという港から、社会という海に向かって漕ぎ出す、ボートのオールを握っている自分の姿を想像してください。ボートにはたった今、皆さんが受け取った学位記が置かれています。学位記は、それぞれの学科や専攻科あるいは大学院専攻で学んだ知識と技能について、これから海に漕ぎ出す上での基本的な技術力は備わっていますという大学としての保証を意味しています。

しかし、出港の許可を得て、漕ぎ出そうとする外洋は、決して穏やかな時ばかりではありません。今までの大学内での訓練では経験したことのない大嵐、牙をむき荒れ狂う波が待ち構えていることもあります。嵐が過ぎ去るまで港に待機するのも一つの選択です。しかし、オールに手をかけ、どうしても荒波に立ち向かわざるを得ないことも、これからの人生には、何度も何度もあることでしょう。今から船出する皆さんに、心の中に備えておいて欲しい大切な二つのものについて、最後の講義としてお話しをすることにします。

心の中に準備すべき二つのものとは何でしょうか。一つ目はオールを漕ぎ出す勇気を生み出す力となる「高い志を持つ」ということです。イソップの寓話を紹介します。ある建築の現場で3人の男の作業員が、同じ労働作業をしていました。レンガを積み上げる作業です。たまたま通りかかった人が、男達に「何をしているの?」と尋ねました。1人目の男はぶっきらぼうに「親方から命令されたからだ。唯レンガを積んでいる」と答えました。2人目の男は「家族に食べさせるために働いているのさ」と相変わらずうつむいたまま答えを返しました。しかし、3人目の男は、晴れがましく顔を上げてこう答えました。「歴史に残る大聖堂を造っているのさ!」。いかがでしょうか。同じ作業をしながらも、1人目の男は義務としての労働。2人目の男は生活という目的で作業を語っていますが、3人目の男は、素晴らしい志を労働の中に組み込んで作業しています。この男が、後世に残す作品を作るような気持ちで仕事に取り組み、今の自分の労働に誇りを持って、澁刺と作業している様子が目に浮かんで来ることと思います。

これからの社会において、他人の命令や目標の下に、課題を与えられることが多々あるでしょう。しかし、その内容を単なる作業とし、働かされているとのみ感じるのか、作業の意味や目的を理解し、自分の未来への目標に繋がる志のレベルまで創造して仕事をするのか、この違いは、これからの航海への取り組み方、つまり人生の質において、決定的な差を生み出すということをしつかり心に刻んでください。さらに志は、より高い挑戦への

意欲となり、険しい波を乗り越える意欲を生み出します。乗り越えた経験は、さらなる実践力として自分の経験値を高め、より質の高い人生への目標という大きな挑戦に向かう勇気を与えるに違いありません。

さて今まで、航海への挑戦を何度も語りました。しかし長い航海においては、立ちほだかる大波で、一步も前に進めず絶望感を抱いて港に引き返さざるを得ないことも何度か経験するでしょう。心に準備する二つ目は、そうした打ちのめされた絶望の淵においても踏みとどまる、すなわち、「絶望に耐える心」です。そのためには、「絶望とは生まれ変わるための陣痛」という亀井勝一郎の言葉を心の隅にしまっておいてください。耐えながらも、前に進む意欲を失わないことが、いつか必ず、心が震えるような航海の成功を導きます。大嵐が去り不安を克服した時に沸き上がる感動は、絶望に耐えた経験があるからこそ産まれます。このことを教えてくれる中国の諺があります。「けいこ春秋を知らず」という言葉です。けいことは蟬のことです。暑い夏に初めて地上にでて来る蟬は、雪の積もった厳しい冬を知ることなく、夏という季節の恵みに感動もなく、唯鳴いているということです。後に親鸞は人に対し、恵まれた夏だけではなく、冬すなわち全く異なる世界を理解そして体験することが人の成長に重要であることをこの諺で説いています。絶望を経験したからこそ、自らが乗り越えた達成感はさらなる意欲を導き、新たな航路に挑戦する、よりステージの高い志を生み出す力になります。つまり、心に準備した高い志と絶望を乗り越える2つの力は相互に繋がりがあって、皆さんのこれからの人生と言う航海を、しっかりと支えていくと言う確信が今までのお話しの結論です。

これで最終講義は終わりました。さあいよいよ出航です。皆さんが活躍する舞台は、皆さんが学ばれた国際文化、健康、経営、そして情報科学を含め、多岐に亘る幅広い分野において広島、日本国内、そして世界中のいたるところに準備されています。胸を張り、深呼吸して未知なる未来へとしっかりと漕ぎ出してください。併せて被爆後、山、川のおりなす自然美と、都市機能が見事に調和して復興した平和都市広島において、心身とも最も成長した青春時代のかけがえのない経験とこのキャンパスで学んだ思い出を大切に心に積んで行ってください。そして、卒業した後も人生という航海において、再びエネルギーの供給や、絶望からの新たな出発を必要とする時には是非、この広島キャンパスに帰港し、休息を取って再び出港してください。教職員一同、皆さんの航海をいつまでも応援し、見守っていくことを最後にお約束し、卒業への辞を閉じたいと思います。さあ、今こそ手をかけたオールに力をこめてください。航海の無事をお祈りします。皆さんお元気で。

ご清聴 有り難うございました。

平成 29 年 3 月 23 日

県立広島大学 学長 中村健一